

聞名仏教

第 158 号 毎月発行
(発行日) 2023 年 11 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

九十まで生きる 佐々木蓮磨

ある日、一人の老人が寺

に訪ねてきまして、いかに

も嬉しそうに話しますには、

「ご院主さん！ 私は先日、

人相見に出会いましたので、

自分はいくつまでくらい生

きられるか、と尋ねました

ところ、人相見がいうには、

あなたは九十歳までくらい

は生きられる、と申しまし

たので喜んでおります」と

申しますから、私はその老

人に言いました。「あなたは

悪いことを聞きましたねー。

むしろ聞かぬ方がよかった

のではないですか」と。す

で生きるとすれば、明年に

なると十九年にちぢまり、

明後年になると十八年にち

ぢまり、やがては十年にち

ぢまり五年にちぢまり、つ

いには一年にちぢまります

よ。そう考えると、今から

年々淋しくなるではありません

せんか。死ぬ年を知らねば、

いつまでもノビノビとした

気持ちで暮らされたのでし

たがねー」と申しましたと

ころ、今の老人は「なるほ

ど、その通りですなー」と

言っていたささか淋しい様子

でありましたが、その後、

健康がすぐれず、ついに三

年後に、七十三歳で亡くな

ったのであります。

すべて人間の喜びとか、

楽しみというものは、一日

々々と時間から食われて行

くのです。いかなる大きな

財をかかえても、またいか

なる健康な肉体の持主でも、

一日々々と時間から食われ

ておることに間違いはあり

ません。

近來は不老長寿というこ

とが喧しく叫ばれるように

なり、そのためにいろんな

強壯剤が売り出されたり、

若返り法が宣伝されたりす

るようになったことは、決

して悪い傾向ではありませ

んが、ただ一つ心得ておら

ねばならぬことは、そうし

たものに絶対性がないとい

うこと、それから、如何な

る妙薬を用いても、また如

何なる方法を講じても、一

日々々と時から食われてお

るということでもあります。

今の老人なども、九十歳

と聞いて非常に喜んだので

ありましたが、一年ごとに

九十の数は減り、しまいに

は残すところあと一年とい

うときが必ずくるのであり

ます。また人相見の言も決

して絶対的ではありません。

だから楽しんでいたのも

《 祈り 》

ウクライナに攻め入らず
ロシアはロシアで仕合わせ
になれ

ウクライナはウクライナで仕
合わせになれ

台湾に攻め入らず

中国は中国で仕合わせにな
れ

台湾は台湾で仕合わせになれ

共に生き、共に助け合えよ

(住職の祈り)

つかの間、ついに三年目に
死んだのであります。

人間というものは、知恵
があるようで、その反面に、

分かり切っていることが案

外分からぬ場合が多いので

あります。知恵の勝れた大

馬鹿ものは、人間でありま

しょう。

『信心清話』一九六五年刊より

対話編

『浄土真宗』

4

B 「アミダ仏ははかりないのちであり、はかりない光明であること、そして光明のはたらきは智慧と慈悲のはたらきであることをお聞きしましたが、それと人である私とどういう関係になっ

ているのでしょうか」
A 「まず人のことですが、人である私たちはどういう状態になっているのかを仏教では、覚れる聖者でないかぎり、迷える凡夫になっていると教えられます」

B 「迷える凡夫の状態とは」
A 「私の当面の当体である自我は、それを取り巻く世界いわゆる自然と他の人々の関係でしかものごとを考

えていません。しかもこの自我は我愛我執的自我であって、いわゆる自我中心のものごとを考えやすい。ですから利害損得、優劣、勝ち負けなどに非常にこだわり

ます」

B 「なぜ自我はそのように自己中心的に考えるのですか」
A 「それは人は自我しか知らず、この自我は大自然とも離れ、他者とも離れた孤立した私であると考え、浮遊し流動している私です。仏教という流転しつつある私です」

B 「自然とか他者とかから切り離された個我に生きていくのですね。そうするとどうい

う問題が起きますか」
A 「伝統的に言えば、貪瞋煩惱が起こつてまいります。さらに言えば不安煩惱と孤独感、空虚感などが沸き起こつてまいります」

B 「不安煩惱とは」
A 「死の不安、病気の不安、生活不安、転落する不安、世界の不安などです。これみな不安という煩惱です」

B 「死の不安とは」
A 「死にたくないけど死な

ねばならないという恐れ、そして死んでどうなるのかという、これは大きな不安です」

B 「病気の不安とは」
A 「今は健康だけでも病気になるたらどうしようとか、今の病気が重くなったらどうしようとか、癌になったらどうしようとか、

これは私たちがしょつちゅう感じて

いる不安です」
B 「生活不安とは」
A 「将来高齢化したとき今の貯蓄で大丈夫だろうかとか、収入が減ってきたらどうしようかとか、このままでは食うていけぬようになるのではないかと、などの不安です」

B 「転落する不安とは」
A 「経済状態とか、健康とか、社会的地位とか、身体的な能力や、知的な能力の低下による転落とか、人の評判や評価の低下などの不安です

B 「世界の不安とは」

A 「現在のよう

に世界でドンパチがあちこちに起こつて将来どうなるのかとか、CO₂の増加による気候変動や原子力発電のリスクとか、食糧危機とか、ウイルスの増加とか、政治や政策の劣化などによる世界の悪化による不安です

ね」
B 「こうした不安だらけの人生や世界の状況の中で生きざるを得ないので、そういう私たちに生きる本当の支えというものはあるの

喜びというものはあるのでしょうか」
A 「あります」
B 「それはどこに」
A 「今ここに」
B 「私のいる今ここにあるのですか」

A 「ええそうです」
B 「それはどのようにあるのですか」
A 「私たちは今ここにしか

実際は生きていません。どれほど将来に不安になっても、私が実際にいるのは今ここしかなく、その今ここが一瞬一瞬連続していつ

います」

B 「私の状態、私の周りの状態がどうなっているか、私はいつでも今ここにしか存在していないのです」

A 「ええそうです。そしてどこまでも、どうい

うことがあっても、今ここに生きているという事実は私

がこしらえた事実ではありません。私が思い煩うから、あるいは考えるから、あるいは計らうから、できた事

実ではありません。逆に今ここに存在しているから、その上ではじめて煩ったりし、考えたり計らったりできるのです」

B 「今ここに生きてい

B 「我ならざるはたらきによつて生きている、生かされてるのですね」

A 「ええそうですね」

B 「我ならざるはたらきとは」

A 「我ならざるさまざなはたらきによつて、私たちは生かされているのですが、そのさまざなはたらきは個々別々なものではなく、すべてのものはつながつていてそれ自体で独立したものではありません。仏教ではそれを縁起といいます。すなわちすべてのものは関係性の中にあるというのです」

B 「すべてのものが関わりのなかにあるのですね」

A 「ええそうですね。そして関わりが成り立ち、関わりが変化し動きつつあるのは一大不可思議な動力というか場の力がはたらいているからですね。それを量りなきいのちというのです」

B 「仏教では寿命無量というのですね。その量りないのちが今ここにはたらいていて、そこに私が存在できているのですね」

A 「ええ、ですから量りないのちといつても、なにか特殊なそういうものが私を超えてはたらいているというようなものではなく量りないのちの働きはさまざまなもの、万物の働きとしてあらわれているのです」

B 「さまざなものはたらきとは」

A 「それは目前のものにハッキリ現れています。大きなものでは空気の働き、太陽の働き、植物、大地、水など、私が今ここで生きていくことの条件になっています。食べ物も住まいも、自分で作ったものはありません。住まいもその材料も加工技術も与えられたものです」

B 「加工技術の能力は人間の作ったものではありませんか」

A 「そうした技術を生み出す人間の思考能力、脳の働きも人間が作ったものではありません。人間の身体自体も私の作ったものではありません。心臓も肺も血液もすべて我ならざるはたらきです」

B 「そうですね。考えると能力もとは与えられた能力ですね」

A 「ええ、心や意識も同じです。心は一瞬一瞬動きづめですね。心の働きは全く不思議です。これなどは私が作ったものでは当然ないのです。我ならざる大きな力が働いているのです。その証拠に心の働きを自分で止めようと思つても止めることはできません。一瞬一瞬動き、生滅を繰り返しています。誠に不思議な働きです」

B 「そうするとこの宇宙から太陽から地球から、生物から身体から心から、そういう万物の働きの原動力ははかりないのちのはたらきといえるのですね」

A 「そういういのちのはたらきによつて、今ここに私がそのつど存在し得るのであるのはかりないのちのことを寿命無量、インドの梵語でいえばアミターユスといえます。いわゆるアミダ仏です」

B 「そうするとアミダ仏のはたらきがなければ私の存在

自体があり得ないのでですね」

A 「ええそうですね。私はアミダ仏によつて生かされ、支えられ、掴まれているのです」

B 「アミダ仏のはたらきの外に私はあり得ないということですね」

A 「ええそうですね。そこで私はどういう状態になつても、世界がどういう状態になつても、私はアミダ仏と共にありアミダ仏を離れることはなく、アミダ仏によつて支えられています。たとえ私が死んだとしてもアミダ仏のはたらきの中であるとということなんです。そうするとどんなに私が不安煩惱の中にあつても、私と共にアミダ仏は常にまします。このアミダ仏にであうことによつて、私は支えられ、安定を得ることができるようです」

B 「ではアミダ仏に支えられており、アミダ仏に掴まれていることを知るならば、一切不安がなくなるのですか」

A 「緩和はしますが、一切

なくなるわけではありません。大体、今まで迷いを重ねて来て、この我が身に執着し続けてきたという煩惱の習氣（根強い習慣）がありますから、アミダ仏にであつても不安煩惱が死ぬまで続きます。ただそうした不安煩惱を縁としてお念仏申すところに、アミダ仏が私を抱いていてくださつていくという智慧がそのつど与えられます。ですから、不安煩惱の中に安定が与えられるのです。不安がみなお念仏の縁となつて、お念仏を聞く処にアミダ仏が「我、汝と共にあり、心配しなくていい」というお心をそのつどお聞かせいただいて、闇夜に月の光を浴びて歩むように、不安煩惱の人生の中を生き抜かしていただくのです」（了）

* * *

〈遠方法話予定〉

* 十二月八日から九日午前。福井市。福井別院（大谷派）
報恩講（電 0776214100）
* 十二月九日夜から十日午後。姫路市。西源寺（大谷派）
報恩講（電 0792977624）

信心夜話

(以下、領解)

近年まで福井市におられた厚信の野世芳水師の作られた法歌があり、これがとても有り難いので、この紙上で味わってみたいと思います。長い歌ですので、三つぐらいに区切って書いてみます。

『声が親さま活き仏』

野世芳水作

光と命かぎりなき
慈悲とお智慧の阿弥陀様
色も形もましまさず
凡夫の眼には見えねども
いつも仏は離れず
凡夫の私に付きそうて
抱いて護り呼び給う
これが六字の声仏
耳にきこえる念仏は
口にこぼれる称名は
我に離れぬ活き仏
必ず救うの声仏
声が仏だ親仏
ここに居るぞとよび給い
まかせたのめと呼び給う

(続)

光といのちの無量のはたらきであり、その光の内容は智慧と慈悲で、これがアマダ仏の本質ですね。しかもアマダ仏は色も形もない、はたらきそのものから、目には見えないが、一切に遍満し、みちみちておられます。今この私に一瞬も離れずに凡夫の私に付き添って下さって、私をアマダ仏から離れないように抱いて護って喚びづめに喚んで下さっています。いつも護っていてくださる、という実感は信心のところから感じることですね。それまでは護られているということは感じられません。「護る」とは真理へと導いて下さるということです。一度、お念仏が大事となつて称え、お念仏のお心を聞く身になれば、お念仏がその人を「撰取不捨の真理」へ、真理へと導いて下さつて、そこから離れないようにさまざまな順逆の縁を通して導いて下さり、遂にアマダ仏にあわせて下さるのです。病気を縁としてお念

仏を申す、生活不安を縁としてお念仏を申す、悪口を言われてお念仏を申す、怒りや悲しみを縁として念仏を申す、そういう逆縁を縁としてお念仏を申す生活が、本人は知らねどもそのままアマダ仏のフトコロの中に包まれていつているのです。アマダ仏に一度あえば二度と離れず、しかも更に真理の深みへと次第々々に導いて下さるのです。それが「護る」という意味でしょう。

南無阿弥陀仏と喚びたもうお声、耳に聞こえるお声、口に称え現れるお声が、一番具体的な私に離れぬアマダ様の現れです。これが生きたナマのアミダ様です。広大無辺なアマダ様はご自身を南無阿弥陀仏の一句にまでご自身を否定し、限定し、ちぢまって下さることによって極く小さな私にもアマダ様のお慈悲、お心、おいのちに気がつくことができるのです。教義的に申しますと第十七願がその願で、はかりなき大悲のいちぢであるアマダ様は『正信偈』にありますように「重誓名声聞十方」(重ねて誓うらくは名声十方に聞こえんと)で、十方の衆生に名となり声となつてまで聞かせたい知らせたいの誓いが十七願です。これを親鸞聖人は「大悲の願」と仰せられています。

この大悲の願によって南無阿弥陀仏の名号を私たちに回向して下さるのです。回向とは与えることであり、与えるとは、何も分からない愚かな私たちに、先ずは積尊や善知識の説法を通して念仏を称える身にして下さる。そして私が称えるナムアマダブツのお声としてご自身を聞かせて下さるのです。私がお念仏を称えるのも聞くのも第十七願の大悲のお陰です。一声一声がアマダ様のお出ましです。ナムアマダブツは「必ず救う」「ここに居るぞ」の喚び声です。「引き受ける」「我に任せよ」と喚んで下さる声にまでなつて下さった大悲のアミダ様です。

(了)

【住職雑感】

十月半ば、博多の

万行寺に、真宗の高僧七里恒順師のお墓にお参り。博多から妻とバスで平戸に向かう。快晴続きで景色が素晴らしい。平戸を二度訪れたザビエルの記念碑、平戸で亡くなった三浦按針の墓を訪れ、その足で美しいザビエル記念教会へ。絵になる教会である。風情のある町屋の通りをイギリス商館と鄭成功のいた場所などを通じて、午後から本土に渡り、「焼罪遺跡」という意味深長な名前の場所を訪れた。キリシタン弾圧によって火刑にあったイタリアの若きイエズス会の宣教師が火で焼き殺された場所である。その後潜伏キリシタンが明治になって禁教が解かれて建てた「田平教会」を訪れる。中は広くステンドグラスが美しい。中国人のカトリック信者の参拝団が来ていた。翌日は、生月島の山田教会と「島の家」にある隠れキリシタンの資料を拝観。目の前の海に浮かぶ「中江の島」を見る。この島は多数の信者が処刑された処で、信者の「聖地」になっている。その後、平戸島の根獅子に行く。美しいこの浜辺で一家六人の信者が処刑された。彼らの墓である「おろくにんさま」へお参りして、栄西禅師が中国から帰国した最初の場所に行く。禅師が座禅した大きな坐禅石を拝し、最後にオランダ商館の倉庫を再現した館を覗いて旅を終えた。世界文化遺産のある平戸は見所が多く、また日本宗教史にとっても特別な場所である。